22、信楽開発

南無阿弥陀仏とは、縦に三世を貫き横に十方に遍する宇宙の真理を諦得された人格者を信奉さして頂くことである。念仏とは今の心は人に非ずと言う事で、み仏様に信順無疑する時は法龍の相の儘で、体徳から言えば阿弥陀仏と一体であり、機相から言えば有漏の凡夫である。何と有難い事か。空間的無辺だから何処でも救うと言う事であり、時間的無限だから何時でも救うと言う覚体だから、それなら何処でも何時でも救うのなら今救うて下さい、今此処でと言う事が平生業成とは　底の知れない有難さではない

か。その光明無量寿命無量の念力が私に届けば　信楽の二文字となり、開けば信心歓喜となり、曇鸞大師は破闇満願と教え、道綽禅師は罪悪観と無常観で説き、善導大師は信機信法で示していらるるのだ。この仏智満入の一刹那を宗祖大師は「信の一念と言ふは　信楽開発の時尅の極促を顕し広大難思の慶心を彰はす」と教えられてあるのだが、千載の闇室に光明無量の光が届けば室内が明るくなり、寿命無量の仏徳によって感謝法悦となるのである。

道俗よ!!　信の一念こそ浄土真宗の極意であり、唯信独達の法門の根幹をなすもの、八万の法蔵を読破する一刹那、この難関を突破するから極難信と言うのだ。この関所を超越ささるる事は不思議の中の不思議だ。この深妙の境地を諦得すれば十方法界の功徳を全領するのだ。進め〳〵一歩も退いてはならないぞ。

然るに我機を眺むれば　心中閉塞のその中、勝他我慢に無智我見、放逸無慚に嫉視反目、蛇蝎奸詐に強欲非道、煩悩具足で欠けた物がない。その悪を悪と知らないで素直に信じていると名利に人師を好んでいる心が照らし出される迄には　どれだけの御手間

が掛かった事か知れない。調熟の光明のお育てにより悪を悪と知らされた時、地獄一定を知らされた時、往生の望みが絶えた時、不可思議の願力として仏の方より往生を治定せしめられた時、必堕無間が極楽一定に飛び上った時、心も言葉も絶えた味、あッともすッとも言えぬ味、十方法界我物なり、光明輝く広い天地、六種に震動すると言ってよいか、虚空より妙華が降ると言ってよいか、想像もつかぬが、形容も出来ない。盲者が開眼の一刹那、無明の闇が晴れ亘った信楽開発の一念は、不可称不可説不可思議で言葉に掛けられないと言えば「言わず講」と貶すかも知れないが、有難いとか、勿体ないとか、嬉しいとか、並べて見た処で九牛の一毛も表現出来てはいないのだ。その次の刹那の喜びを広大難思の慶心と仰せられたのだが、本当に広いぞ大きいぞ。想像のつかない慶びであって、此の人生の、結婚したとか、宝くじが当ったとか、家が建ったとか当選したとか、人間の世界の喜びと比較になるものは微塵もない。南無阿弥陀仏〳〵。間に合わない奴が本願の間に合うたとは不思議の中の不思議ではないか。無量永劫の迷いの打留めとは仕合せではないかと躍り上がらずにはいられなんだ。この一念

が相続するのを　善導大師は礼讃に「上の如く念々相続する者は十は即ち十生れ、百は即ち百生る、何を以ての故に、外の雑縁なくして正念を獲たるが故に」と腹の据りが決まるのだ。如実の信には如実の称名が噴き出るのだ。如実の称名たる報謝の称名には献身的の報恩の行は相続するのだ。それが俗諦の行儀となって顕れてくるのだ。